

巻 頭 言

精神科医も足りない

竹内知夫 愛光病院

Tomoo Takeuchi

最近小児科医と産科医の不足で、小児の夜間救急医療やお産ができないとマスコミが騒いでおり、政府も日本医師会もあれやこれや百花繚乱の如く言い合っている。それでなくとも少子化問題で大変な時に、お産も制限されてしまえばよけい子供が産めない状況が起き、少子化に拍車をかけることになる。

厚生労働省はこれまで医療費減らしのためには、医療費の伸びと医師数は比例するとして、医師過剰を起こさせないように、医学部の定員一割カットを進めてきたが、ここに来てどうにもならなくなり、政府も医学部定員増を言い出している。医師が増えても地域格差や診療科格差があり、医師不足は解消されないという意見もある。

小児科・産科医ばかりが取り上げられ論じられているが、われわれ精神科ではどうであろうか。確かに駅前中心にメンタルクリニックが増え、いかにも精神科は医師不足ではなさそうに一見見えるが、全国的に精神科救急が満足に行われている県はほとんどない。大学病院の精神科も単科精神科病院もいずれもドーナツ現象で、一番必要となる30代～40代の中堅医師が極端に少ないのが現状である。何故なのか？ 精神科において外来患者数は年々伸びており、しかもストレスがらみで自殺の問題もここにきて急にクローズアップされてきている。入院患者は年々少しずつ減少しているが、患者が減少しているのか、看護基準の問題でベット数を減らさざるを得ない影響の結果なのかははっきりしない。

しかし、大学をはじめとして精神科病院も勤務

医が多忙になっていることは事実である。治療のみならず精神保健指定医の指定医業務が年々増加していることもその一因と考えられる。そこで自分で自由に時間設定できる開業医に転進する精神科医が増加するのも無理ないことである。駅前にメンタルクリニックが増え、その結果精神科の敷居は低まったが、時間外の診療、精神科救急が大学病院や単科精神科病院にしわ寄せとなってきている。そのため中堅どころの精神科医がまたまた開業志向に走るという悪循環が生じている。精神保健指定医も現在11500人ほどいるはずであるが、全国の単科精神科病院の常勤指定医は3300人弱である。やはり指定医の数を倍近く増やすしかない。

医学部の定員を増やしてもあまり効果は期待できない。何故なら最近の医学部の学生は、自分の偏差値で医学部に入学してくるものが約半数いる。当院での医学部学生実習や新医師臨床研修で研修に来ているものに聞いてみても、まだ将来の医師としての方向性が決まっていないものが半数近くいるのが現実である。医師になりたくて医学部に入学したというより、自分の偏差値からいって医学部に入らないと恥とか、高校の教師の方も医学部を勧める傾向が強い。

いろいろまわってみて決めますという答えがかなり多い。精神科実習の時に精神科医療・精神医学の面白みを何とか伝えて一人でも多くの研修医が精神科医師を目指してくれることを願っている。切実な問題である。